佳作

「未来」の、「今」の私に

青森県八戸市立江陽中学校
３年　佐々木　陽奏

この世に生まれてから 14 年が経った。あと１カ月で 15 年になる。15 歳は一番大切にするべき時期だと私は感じている。自分の生き方を見つける時期だからだ。

「自分の中の常識にとらわれないこと」。こんな言葉が近ごろ頭に浮かぶ。

以前はあまり音楽が好きではなかった。しかし、中学生になってスマートフォンを使うことが増え、音楽を聴くようになった。いずれはロックのライブにも行きたいと思うくらいだ。音楽は今となっては私にとってなくてはならない存在になった。

私も姉も魚介類が嫌いだ。回転寿司に行ってもサイドメニューのラーメンを食べに行くようなものだ。魚介類はあまりおいしくないと、なぜか誰かに洗脳されてきたのかもしれない。しかし、あるとき、天下一品と言われる魚を食べる機会が訪れた。それまで好んで食べようとしなかったが、あまりのおいしさに衝撃を受けた。それ以来、魚を好きになった。

音楽然り、魚介類然り……。こういった体験を繰り返し気が付く。私は「自分の中の常識にとらわれていたのだ」と。考えが変われば今までの生活は嘘だったかのように変わる。人は常識を疑うことが難しい。でもそれは狭い世界の偏見であることも多い。私はロックがかっこよくて魅力的なことを知った。魚たちは目を見張るほどおいしいことを知った。こんな素敵なことを 15 歳までに知ることができて本当に良かった。こんなふうに自分の常識にとらわれずに新しいものを受け入れていける人間でありたい。経験すること、想像すること、思い込むのではなくて行動に移すことの大切さを私は知った。

中１のころの炎天下の横断歩道。車を止めて歩行者の私を横断させてくれたドライバー。渡れなくて困っていたとき、目が合って嬉しかった。感謝の思いでお辞儀をしてみようと思ったあの日。ドライバーがお辞儀を返してくれた。ふうっと、風が通った気がした。見知らぬ人と心が通った気がした。引っ込み思案な私が一歩踏み出せたことが嬉しかった。夏休み、地域の公園での絵本の読み聞かせ会。やってみたいけれど新しいことに挑戦することを恐れてた私。友達が「一緒に参加してみよう。」と誘ってくれた。早朝の涼しい木陰。風がちょっと髪をゆする。目を輝かせている小さな子どもたち。木々の香り。朝露を含んだ土の匂い。すうっと息を吸い込み、後ろの方の子どもにもよく聞こえる

ように、思い切り声を張る。感情豊かに、自分の表情まで意識して。前のめりに聞き入る子どもたち。それらの日々を忘れない。自分から行動に移し、誰かから刺激を受けて未来はつくられていく。言い換えれば、全てが何かの記念の日であり、それは誰かと関わることでつくられる。

一方で、人とのつながりが増えすぎると、自分を見失ってしまうことがある。だからこそたくさんの考え方、感じ方を人との関わりの中で学び、自分の時間も大切にすることが大事だと思う。ふと、一人になって初めて、自分を見つめなおしたり、自分の幸せについて深く考えたりすることができる。もちろん本当に好きな人とのつながりは、人生をより豊かにしてくれるはずだ。私は友達が少ない。だからこそ、友達を大切にしたい。ライブの後、寿司屋に行き、特大サーモンを二人で食べながら談笑してみたい。ライブの感想を言い合いながら。

自分の中の常識にとらわれずに進むと、新しい景色が見えてくる。未来の自分に伝えたいこと。それは「未来は、今の自分がつくり出していく。」ということ。

これから秋が深まり、そのうち雪が降る。季節の移り変わりとともに、私も周りも受験モードになっていくだろう。その勢いで、高校、大学も過ぎて、いつしか就職しているだろう。もしかしたら、そんなある日、この作文を読んでいるかもしれない。たまに読み返して、「こんな自分もいたのだ」と愛しい気持ちになってくれたら 14 歳の私も幸せに思う。人生は長い。1 年後はどうなっているかわからない。当たり前は、いつだって当たり前とは限らない。どんなに苦しくてもつらくても、独りよがりで生きようとせず、一歩一歩確かめながら進んでいこう。どうか未来も、笑っている自分でありますように。

未来の自分に伝えたいこと。「未来は、今の自分がつくり出していく。」と、そのときそのときの「今」の自分に伝えたい。